

信仰の醍醐味

私は信仰の味に就いて世人に告げたいのである。天下何物にも味のないものはない。物質にも、人間にも、生活にも、味の無い物は殆んどあるまい。人生から此味を除いたら、文字通り無味乾燥全く生の意欲は無くなるであろう。従而人間が生に対する執着の根本は、味による楽しみの為である——といっても過言ではあるまい。信仰にも味のある信仰と味の無い信仰とがあるのは当然である。処が世の中は不思議なもので、恐怖信仰というのがある。それは神仏を畏怖し、戒律に縛られ、窮屈極まる日を送り、自由などは全く無く、常に戦々兢兢たる有様で、斯ういう状態を私は信仰地獄というのである。

本来信仰の理想とする処は常に安心の境地に在り、生活を楽しみ、
歡喜に浸るといふのでなければならぬ。花鳥風月も、百鳥の声
も、山水の美も、悉神が自分を慰めて下さるものであるように思わ
れ、衣食住も深き恵みと感謝され、人間は固より鳥獸虫魚草木の末
に到るまで親しみを感ずるようになる。之が法悦の境地であつて何
事も人事を尽して後は神仏に御任せするといふ心境にならなけれ
ばならないのである。

私は常に、どうしても判断がつかぬ難問題に逢着した時、觀音様に
御任せするといふ事にして、後は時を待つのである。処が想つたよ
りも良い結果を得らるる事は幾多の体験によつて明かである。殆ん
ど心配したような結果になつた事は一度も無いといつても可い。又
種々の希望を描くが、その希望よりも必ず以上の結果になるから面

白い。斯ういう事もある。何か悪い事があるとそれを一時は心配するが、きっと良い事の前提に違いないと思い、神様に御任せしていると、必ず良い事の為の悪い事であつた事が判り、心配したのが馬鹿らしくなる事さえ往々あるので、実に感謝に堪えない事がある。要するに私は奇蹟の生活者と思っている。私が言う信仰の醍醐味とは即ち此様な次第である。